

光を見る

奨励	山本 真司 [やまもと・しんじ]
奨励者紹介	同志社国際中学校・高等学校教主任 日本キリスト教団錦林教会担任教師

闇の中を歩む民は、大いなる光を見
 死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。
 あなたは深い喜びと
 大きな楽しみをお与えになり
 人々は御前に喜び祝った。
 刈り入れの時を祝うように
 戦利品を分け合って楽しむように。
 彼らの負う輓（ルビ：くびき）、肩を打つ杖、虐げる者の鞭を
 あなたはメディアンの日のように
 折ってください。
 地を踏み鳴らした兵士の靴
 血にまみれた軍服はことごとく
 火に投げ込まれ、焼き尽くされた。
 ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。
 ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。
 権威が彼の肩にある。
 その名は、「驚くべき指導者、力ある神
 永遠の父、平和の君」と唱えられる。
 ダビデの王座とその王国に権威は増し
 平和は絶えることがない。
 王国は正義と恵みの業によって
 今もそしてとこしえに、立てられ支えられる。
 万軍の主の熱意がこれを成し遂げる。

(イザヤ書 九章——六節)

ノンフィクション作家の澤宮優さんが「いらすの井戸」の話を『文章歩道』に書いておられます。ある日、佐古純一郎さん（作家、牧師）に誘われて広隆寺に行かれ、「いらすの井戸」に出会ったというのです。「これは『いらすの井戸』と言って、もとは、『いらさえの井戸』と言った。これは『いらさえる、がなまって、そう呼ぶようになったんだ』と佐古さんは言われた。「聖書の記述には社交場として井戸がよく出てくる。しかし、飛鳥時代のお寺に、なぜ『いらさえる、』という言葉が出てくるのか不思議でならなかった」。この事情を中国では景教と呼ばれたネストリウス派の信仰を渡来人の秦氏が伝えたと記しておられます。確かに中国の西安にはラテン語で書かれた碑文が残されていますので、七世紀に秦河勝が建立したこの寺にキリスト教の痕跡があっても不思議ではありません。「正統」と認められなかったキリスト教信仰が一五四九年以前に伝わっていたという伝説は興味深いものです。また、本願寺には漢訳聖書があって、それを親鸞が誂んだという話は『歎異抄』と『新約聖書』の類似性を傍証するのかもしれませんが。有名な「悪人正機説（あくにんしょうきせつ）」（「善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。しかるを世の人つねにいはず、悪人なほ往生す、いかにいはんや善人をや」はイエスの愛の構造に酷似している、「阿彌陀如来」はサンスクリット語の「アミターユスAmitayus」と「アミターバAmitabha」を漢字に当てはめたもの、「寿命無量」と「光明無量」は聖書の「まことの命」と「まことの光」と同じだという主張を澤宮さんは展開されます。実は澤宮さんはこの時、悩んでおられたのです。「僕は仏教の方があっているようですが」と教会から逃げようとしていたと言うのです。しかし、「逃げようとしてもイエスが僕に付きまどってくる感じがした。もう逃げられないな、と観念するしかなかった。僕がイエスという十字架を、背負ってゆくしかない」と決心したのはこの「いらすの井戸」と見てからだった。

実に大胆な信仰告白だと、私は感じました。私たちは迷い悩むとき、即効性のある特効薬を期待していますが、しばしばそれは単なる対処療法で苦しみの闇を照らすことができないのではないのでしょうか。本当に有効な解決方法は、悩む私が他人の語り掛けや忠告を受け入れるために成長することを待つ余裕から生まれてくるのだと思うのです。広隆寺境内の静寂に包まれる『いらすの井戸』は悠久の歴史を通して人生の答えを用意しているように感じるのでした。

さて、聖書の信仰は「ことばの信仰」と言われます。その「ことば」を「言の葉、」ということがありますが、その重みについて『天声人語』で取り上げていましたので紹介いたします。「俄万智さん『テレビやネット、政治家まで、短くて強い言葉があふれている。じっくり伝え合うのではなく、ワンフレーズで振り向かせる風潮が学校に影響していると思う』。在バオグラードの詩人山崎（やまさき）佳代子さんが東京外大で講演した。『声は人の魂を結びつける。声を出す時はみんなに届くように出し、声を聴く時は心を込めて聴く。この二つが欠けると社会はほころぶる』。小惑星イトカワの砂粒をしっかりと持ち帰っていた探査機はやぶさ。『帰ってきただけでも夢のようなのに、夢を超えたものはどう表現しているの』と、計画を指揮した川口淳一郎教授の顔がはじけた。言葉を失うほどのうれしさ、生涯に何度味わえるだろう。」それぞれに深い味わいがある言い回しだと感じます。単なる言葉が思索を通じて「言の葉」に変化して、言葉そのものも力が増していくということなのだと思います。

ところで、ノーベル化学賞が根岸英一さんと鈴木章さんに与えられましたが、その受賞理由は「クロスカップリング反応」でした。解説によりますと、クロスカップリングは、「異なる有機物を結びつけて新しい素材を作り出す技術で、そのままでは結合しにくい炭素同士を触媒を使って結びつける、しかもこれは一過性ではなく反応が次々に続いていくという特徴をもっている。この『魔法の薬』である触媒の応用研究」なのだそう。私は聖書のことばがクロスカップリングに似ていると思うのです。なぜなら人間同士はなかなか結びつきにくいので『魔法のことば』である聖書を使って、次々に人と人の輪を広げていくことができるからなのです。もう一度クロスカップリングに戻りますと、この技術開発で求められている性質は大きく三つあるのだそうです。第一に、狙ったとおりの物質を作り、不純物が少ないこと、第二に応用範囲が広いこと、第三に安全で使いやすいこと。この技術と聖書の世界を比べてみますと、構造的に同じであることが分かります。と言いますのも、この技術は一見関係のない分野で広く使われているからなのです。それは、ちょうど聖書が異なる文化や民族を超えて浸透していることと似ているのではないのでしょうか。テレビや携帯電話の液晶材料・野菜用の殺菌剤・降圧剤・抗生剤・抗がん剤・エイズの治療薬・次世代有機EL（= Electro Luminescence : エレクトロ・ルミネセンス）や機能性分子開発などその応用範囲は留まるところを知りません。これもまた聖書の世界を予見しているように思えてなりません。そして、決定的なこと、それは「無償の神の愛、与える愛の世界、にあるのです。多くの人間が利己的な生き方を是認し、独り占め、独占といった自己愛に生きる時代にあつて、この二人の化学者は自分の研究成果の特許を取っていないということなのです。このことで自由に広くクロスカップリング技術が使われているのです。「広く使ってもらえるのは、化学者として何よりうれしいです」という「言の葉、に私は感動を覚えるのです。これこそが今求められている価値観、発想なのではないでしょうか。

私たちは、「驚くべき指導者、力ある神/永遠の父、平和の君」を待ち望む時を過ごしています。この瞬間にもがき、苦しむ数多の魂を覚えながら、「正義と恵みの業によって/今もそしてとこしえに、立てられ支えられる。」という言葉が味わっているのです。だからこそ、「闇の中を歩む民は、大いなる光を見/死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。」という一節が大きな意味をもってまいります。

私たちが生きる現実がたとえ不毛な荒野のようであっても、それでもなお希望を失わない心の強さを神は私たちに与えて下さっているのです。「ノーベル賞を受ける確率は、過去の受賞者と人口から計算して、一千万分の一。途方もないようでも、十人中の一位を七回繰り返せば到達する数字と言えます。高い夢を求め、飽くなき努力をして下さい。大志を抱いてほしいですね」。根岸さんは私たちに語ります。

私たちは自分の状況を受け入れることができずに嘆き、苦しみ、悩むことがあります。そのような人生の危機とも言うべきときにこそ、「いらすの井戸」を訪れて悠久の歴史を身に感じる余裕、一つひとつの言葉が届くように慎重に声を出し、人の出した声を丁寧に聴き、時には自らの利益を捨てて、相手のために生きていく選択をすることが必要なのではないでしょうか。そのことを神は救い主を待つという人間への挑戦のなかに隠しておられるのだと思います。この隠れた豊かな祝福を共に味わいながら歩みを進めていきたいものだと思います。